

## 続『ライ麦畑でつかまえて』の英語

杉 浦 銀 策

前回の論稿に見られた誤植について一言。ミスプリントはかなりの数にのぼるのだが、なかでも致命的なのはp.131における「そもそも 'crap'は'shit'とは違って」という箇所である。これは当然「そもそも 'shit'は'crap'と違って」と訂正されるべきものである。

### その四 'lousy,' 'swell,' 'grand,' etc.

これまで『ライ麦畑でつかまえて』の冒頭の文章に見られる興味深い語句の意味や用法について、脱線気味の考察をあれこれ行ってきたが、ここでは同じ文章に見られる'what my lousy childhood was like'の'lousy'および、これに関連する諸問題について書いてみることにする。'crap'と同じく、'lousy'もまたホールデンの愛用語の一つであった。

まず最初にアメリカ生まれの俗語的成句'lousy with...'(...が群がっている; ...がたくさんある、いる; ...でいっぱい) について。

'lousy with'は『ライ麦畑』全体で計四回使われている。以下にそれぞれの例を引用して、それから簡単なコメントを付すことにする。

1) Then I watched her take off her gloves. Boy, was she lousy with rocks.  
(72:55)

それからぼくは彼女が手袋を脱ぐのを見つめていた。なんと、手は宝石だらけだった。

2) I'm not kidding, the hotel was lousy with perverts. I was probably the only normal bastard in the whole place. (81:62)

ぼくはふざけて言っているんじゃない。あのホテルは変質者がうようよしていたんだ。おそらくあそこで正常な人間はぼくだけだったんだ。

3) The table was lousy with glasses. (97:74)

テーブルはグラスだらけだった。

4) She (=Mrs. Antolini) was lousy with dough. (235: 181)

彼女にはお金がたんまりあった。

コメント。

引用1)は、ホールデンが夜汽車の中で出会った同級のアーネスト・モロー (Ernest Morrow) 少年の母親についての描写である。これは『アメリカ俗語歴史辞典』(HDA S) に引用されている '1868 The vein....to use a miner's phrase, is lousy with gold.' (鉱夫流の言い方をすれば、鉱脈は金だらけということになる) に似ている。

引用2)は、ホールデンが泊っているホテルの反対側の窓から見える変態者の仕草に呆れ返り、思わず眩いた言葉である。まことに絶妙というしかない使い方で、『アメリカ俗語辞典』(DAS) はわざわざこの箇所を引用している。もともと、'lousy'はOEDにもあるように「シラミでいっぱい」(full of lice) という意味であった。したがってホモや変質者を目の前にすると鳥肌が立つ思いのするホールデンにとって、変態者はいわばシラミのようなものであって、それだけにこれはいっそう際立った表現に映るのである。これがエミリー・ブロンテのような十九世紀イギリス作家ならば、"Well, it is—swarming with ghosts and goblongs!" (*Wuthering Heights*, 31) (「いやはや、ここは—幽霊や悪鬼がうようよしていますからなあ」と言うところであろう。なおジョン・スタインベックの短編「人々の指導者」("The Leader of the People") には'lousy'とともに'crawling'を併用している例もある。

"Ought to be plenty mice," Joddy suggested.

"Lousy with them." Billy said. "Just crawling with mice."<sup>1</sup>

「ネズミがどっさりいるはずだよ」とジョディがそれとなく言った。

「ネズミだらけだろうな」とビリーが言う。「うようよしてるってとこさ」

**crawl: to be well or overly supplied (with)** [*H D A S*] あるいは **crawling with: well provided with=lousy with** [Robert L. Chapman (ed.), *New Dictionary of American Slang*, 1986] もアメリカ的俗語で、次の例などは上のホールデンの言い方とたいへんよく似通っている。

The hotel he went to was crawling with prostitutes and “queers.”<sup>2</sup>  
 彼が行ったホテルは娼婦やホモでいっぱいだった。

引用3) はグラスという普通の物体が対象になっていて、こうした例は一般的にはむしろ少ない部類に入るのだろうが、この場合テーブルの上の散乱ぶりをよく表している。

引用4) は'lousy with money'と同義で、典型的な使い方である。ジムズ・ジョイスの『ユリシーズ』には同じ意味を表す言葉として、'He's stinking with money...' (あいつにはうなるほど金があるからな) や、'The father is rotto (=rotten) with money.' (あれの親父はくさるほど金があるんだ) などが出てくるが<sup>3</sup>、'lousy with money'は見られない。

このように私は、'lousy with'がアメリカに起源をもつ俗語的成句だとばかり思っていただけに、*H D A S*を覗いてみて一瞬ぎくりとさせられたことがある。そこには十六世紀のイギリス作家 Thomas Nashからの引用が提示されていたからだ。

1593-94 T. Nashe *Terrors of Night*, in *Works* I 349: The *Druides* that dwelt in the Ile of *Man*, which are famous for great conjurors, are reported to haue beene lousie with familiars.

マン島に住んでいたドルイドたちはすぐれた魔法使いとして有名であるが、彼らには魔物がいっぱい取り憑いていたと報告されている。

しかしこの辞典は同時に、この用例は「ほとんど確実に偶然的な (almost certainly fortuitous)」ものだという注釈をつけてくれていて、なん

だか救われた気になったのであった。教室でアメリカ生まれの俗語として教えてきたからである。

*OEDS*は、'lousy'について 'Swarming with; abundantly supplied with (money, people, etc.); full of. Const. with. slang (orig. U.S.)'という定義を与えたあとで、古い用例として次のような引用を行っている。

1843 *Spirit of Times* 4 Mar. 7/3 He was lousy with money, and dared any man to face him.

彼は金がうなるほどあり、誰でもいいからかかってこいと言った。

1856 *Democratic State Jnl.*(Sacramento, Calif.) 6 ct. 2/3 The bed of the river is perfectly lousy with gold.

川床は完全に金だらけだ。

前者の用例については、『アメリカ地域英語辞典』第三巻 (*Dict. of American Regional English*, Vol.III, 1996)<sup>4</sup>、そして*HDA S*も、*OEDS*の引用をそのまま踏襲しているから、これまでに文献的に判明している最も古い例はやはり一八四三年ということになるのであろう。またこうした辞書を参照する限りでは、'lousy with'は「お金や金鉱に恵まれた」という意味から始まったらしいという推定も可能なのであろう。あとでもう一度触れるように、*HDA S*によれば俗語としての'lousy'の使用は一八四九年のゴールドラッシュの頃に始まったという説もあるらしい。

なおパートリッジ (Eric Partridge) の『俗語および非慣習的英語辞典』第一巻 (*A Dict. of Slang and Unconventional English*, Vol. I, 1961)では次のような説明がなされている。

lousy with. Full of: 1915: orig. military, as in 'lousy with guns'; esp. in 'lousy with money'. Ex the prevalence of lice.

もともと'lousy with'は一八一五年頃の軍隊用語が起源となっている、というこの説明は学問的には正確とはいえないのだが、この種の説明はわれわれにさまざまな連想を呼び起こしてくれる。つまり'lousy with'がどうやら第一次世界大戦を機として爆発的に使われだしたという言い方も可能なのではないかと疑われるからである。それというのも、第一次世界大戦の

文化史的意味について詳細に論じた不朽の名著、ポール・ラッセルの『大いなる戦争と現代人の記憶』（Paul Russel, *The Great War and Modern Memory*）は、第一次世界大戦の塹壕戦における兵士たちがいかにシラミとネズミに悩まされたかを記述し、かつ'lousy' および'lousy with'についての説明を紹介しながら、'lousy with'は「“That ridge is lousy with Fritz.”（あの尾根はドイツ兵がわんさといる）というぐあい在一九一五年頃口語的語彙に入り込んできた」と述べているからだ。ただしこのことは、第一次世界大戦のイタリア戦線およびそこにおける有名なカポレット退却を描いたヘミングウェイの『武器よさらば』（*A Farewell to Arms*, 1929）には当てはまらないということも忘れてはならない。たとえば上記HDA Sに記載されている次のような'lousy with'を含む表現は、『武器よさらば』には一度も登場しない。

1920 Riggs & Platt *Btry. F 52*: It made excellent concealment for guns and the bushes on the left of the road were lousy with big artillery.

そこは大砲を隠蔽するのに格好の場所になっていて、道の左側の叢林には大砲がどっさり隠されてあった。

これに類する『武器よさらば』の描写は、下の引用に見られるように、いかにも透明で簡潔、そして新聞記事的そっけなさすら感じられる。ヘミングウェイがこの作品の中で'lousy'ないしは'lousy with'を使わなかったのはやはりgenteelな一般読者の反発を恐れたからに違いない。

There were many Austrian guns in the woods on that ridge but only a few fired.<sup>6</sup>

その尾根の森にはオーストリア軍の大砲がたくさんあったが、そのうち数門しか火を吹いていなかった。

また第一次世界大戦における塹壕戦とシラミといえは、われわれはすぐレマルクの『西部戦線異状なし』（*Im Westen Nichts Neues*, 1929）の一節を思い出すのだが、この話はわれわれの話題と直接の関係がないので措くとして、面白いのはヘミングウェイが『武器よさらば』の出版を前にして、一般読者の輿論を買うとして出版社から卑語の使用を禁じられたことをくやしがり、『西部戦線異状なし』の英訳では'shit'や'fart'が用いられているの

に... 云々とMaxwell Perkins宛ての手紙で述べていることである。<sup>7</sup>

'fart'といえば、『ライ麦畑』ではこの語が使われていて (23: 17)、かりにヘミングウェイがこれを読んだとして、いったいどんな感想を持ったであろうか—ふと私はそんなことも空想してみたりする。むろんすでに見たように、『ライ麦畑』ではさすがに'shit'は出てこない。

最後にもう一言、'lousy with'のあとに名詞ではなく、形容詞がくる例もあるということを付け加えておく。もっともこれはE. E. Cummingsの実験詩的表現であるから、英語の辞書に採用されることのない異例のものではあるのだが。

let's start a magazine  
to hell with literature  
we want something redblooded

lousy with pure  
reeking with stark  
and fearlessly obscene  
but really clean  
get what I mean  
let's not spoil it  
let's make it serious <sup>8</sup>

文学なんぞ糞くらい  
といった雑誌を始めましょう  
手に汗を握るようなものが欲しいのです

純粹さがうじゃうじゃしていて  
真正さの悪臭が漂う  
そして不敵なほどに卑猥な  
しかしほんとうに清潔なもの  
ぼくの言うことがお分かりですか  
甘やかさないようにしましょう  
真剣なものにしましょう

つぎに単独で用いられた'lousy'について考えてみることにする。この'lousy'は'shit'と同様もともと正統的なアングロサクソン英語で、いまさらあれこれ詮索する必要もなさそうな単語であるが、二十世紀に入ってからその使い方を少しく眺めていると、それなりの面白いエピソードなりドラマをはらんでいるようにも見受けられる。

すでに述べたように、'lousy'は本来「シラミでいっぱい」の意味であったが、同時にこれまたOEDにあるように「汚い、不潔な、卑猥な」(Dirty, filthy, obscene) などという比喩的な意味、および「また一般的な悪口用語として：卑劣な、下劣な、恥ずべき、軽蔑すべき。今はく稀」(Also as a general term of abuse: Mean, scurvy, vile, contemptible. Now rare) といった意味でも早くから使われていた。そしてOEDは真っ先にチョーサーの『カンタベリー物語』からの例を挙げている。

Chaucer *Friar's T.* 169 A lowsye logelour kan deceyue thee.

あんたなんか下手な奇術師にだつて騙されるからね。

ところがOEDSになるとこのNow rareが取り消され、その上なお「劣る」や「健康ないしは気分がすぐれない」(inferior, poor, bad; ill; in low health or spirits) などの意味も加えられる。そして十八世紀以降の用例を並べながら、ジェイムズ・ジョイスやD. H. ロレンスなどからの引用も載せている。

1922 Joyce *Ulysses* [I blow him out about you..., and then] You come along with your lousy leer and your gloomy jesuit jibes.

お前のことであいつに得意な思いにさせてやろうとしているところへ、お前がこのこのこやって来て、いやらしい視線やらイエズス会士らしい陰気な嘲笑を浴びせるんだからな。

この引用の括弧の部分は私が原典から取り出して補ったものである。ジョイスがここでわざわざ'lousy'を用いたのは、'lousy leer'と'jesuit jibes'というぐあいにそれぞれ頭韻 (consonantal alliteration) の効果をねらったためと思われる。

ところで二十世紀前半の一時期アメリカの批評界を牛耳った感もあるH. L. メンケン (H. L. Mencken, 1880-1956) の古典的名著『アメリカの言語』

(*The American Language*) によれば、'inferior'を意味する'lousy'はイギリスでは遠く一六九〇年頃まで溯ることができ、これが一九一〇年頃にアメリカン・スラングの領域にいきなり突入してきたのだという。<sup>9</sup>メンケンのこの説明は、*HDA S*に載せられている用例などに照らし合わせてみて、必ずしも学問的根拠に裏づけられたものとはいえないであろうが、しかしそこに彼自身の体験的実感が込められているとすれば、われわれはこれを大いに尊重する必要があるだろう。

たとえば早い話がヘミングウェイの書簡集などを読むと、スコット・フィッツジェラルドに宛てた一九二五年十二月十五日付けの手紙の中で三回も'lousy'が使用されているのをわれわれは発見する。<sup>10</sup>

What made *Street of Night* a lousy book was Boston.

『夜の街』を駄作にしたのはボストンでした。

His first book was lousy.

彼の第一作は駄目なものでした。

Now dont be a lousy crut and answer this because letters are worth millions of dollars down here.

殊勝な気持ちを起こしてこの手紙への返事を書くようなことはしないでください。こちらは手紙が何百万ドルにもつきますからね。

'Don't be a crut.'だけでも「馬鹿な真似はよせ」という意味になるのに、さらに追い討ちをかけるかのように'lousy'を付け加えるのであるから、いかにも乱用といった印象を読者に与えずにはおかない。したがってこのような事態を憂えたあるセントルイス在住の投稿者が一九二八年四月、*American Speech* の中で次のように嘆いてみせたのも無理からぬことであった。

### “LOUSY ”

How long will the vogue of this unpleasant adjective continue? It is applied indiscriminately and means nothing in particular except that it is always a term of disparagement.... Some of us grew tired of the iteration of it. Epithets have their vogue and die.... The sooner “lousy” passes the



better. It is a comment on our period that it has lifted it into currency, tolerated it, and made no protest.<sup>11</sup>

この不快な形容詞の流行はいつまで続くのだろうか。見境なく乱用され、いつもきまって非難・軽蔑を表す言葉として使用されるだけで、これといった意味はなにもない。・・・ぼくらの中にはこの言葉が繰り返し繰り返し使われるのにもううんざりしてしまった者もいるのだ。さまざまな形容辞が流行し、そして消えてゆく。・・・lousyなどはさっさと消え去ったほうがよいのだ。これを流行させ、大目に見るだけでなんの抗議もしてこなかったということこそ、われわれの時代の特徴を表している。

この投稿はDAREやHDA Sなどでも引き合いに出され、今日すっかり有名になってしまった感じであるが、その激しい口調の抗議にもかかわらず、'lousy'という形容辞の猛威はその後もういっこうに衰える気配はない。このことは、たとえばその投稿がなされてから四年後の一九三二年に発表された、前述の「ジョンズ・ホプキンス大学のキャンパス・スラング」にこの'lousy' (— a term used to describe anything or anyone causing an unfavorable impression ) が含まれていることから容易に察せられるであろう。<sup>12</sup> またここで、一九三三年に'lousy'が'alley cat' (売春婦)、'broad' (売春婦、ふしだらな女)、'damn' (くそっ)、'guts' (ガッツ)、'madam' (女将)、'mistress' (情婦)、'nude' (ヌード)、'punk' (ちんぴら)、などとともてに映画界で検閲を受け、禁止されたという歴史的事実を指摘しておくのも無駄ではあるまい。<sup>13</sup>

ところでさきほどの*American Speech* 誌の投稿の内容とほぼ似たような抗議口調の一文を、われわれはDASの中にも見出すことができる。

1849: "I wish I could never hear the word lousy again. It is 'lousy' this and 'lousy' that, The rain is lousy, the trail is lousy, the bacon is lousy." Andy Gordon's diary, July 12, quoted in W. E. Woodward, *The Way Our People Lived* (1944)

「lousyなんていう言葉は二度と聞けなくなればいいものを。これもく라우ジー、あれもく라우ジー、雨もく라우ジー、路もく라우ジー、ベーコンもく라우ジー」

この同じ例文を *OEDS* と *HDA S* がさらに完全な形で引用しているが、それによると Tommy Plunkett という人が 'lousy' を一日に五十回も使用し、しかも彼は他の人たちと比べて品の悪い人物というわけではない、という意味のことが記されている。W. E. Woodward (1874-1950) はアメリカの小説家・伝記作者であるが、*HDA S* の説明するところによると、*DAS* と *OEDS* は出典の年代とされる一八四九年を文字通りに受け取っているようだが、どうやらこれはフィクションらしいという。とすれば、上の 'lousy' についての慨嘆口調の一文も一九四〇年代前半のウッドワード自身のものということになる。また前述のスラングとしての 'lousy' の始まりをアメリカのゴールドラッシュ時代と見做す説を唱えたのもウッドワードということになるのかもしれない。

とにかくこのように 'lousy' は何十年にもわたってアメリカの〈良識ある〉人たちの輦轡をかってきたのであるが、第二次世界大戦後の事情も依然として変わることはなかった。それどころかサリンジャーの次の例に見られるように単なる強意語 (Intensive) として使用されるようになってしまった。

“You seem to resent her having a few lousy minutes' freedom.”<sup>14</sup>

「お前は、自分の娘がほんの二、三分でも自由にしているのが気に入らないらしいな」

上記 *American Speech* の投稿者がそれから二十数年間生きながらえて、『ライ麦畑』における 'lousy' を筆頭とする数々の epithets ('crumby,' 'corny,' 'phony,' 'goddam,' 'damn,' 'dopey,' 'moron,' etc.) を目にするのができたかどうか分からない。しかし一九四〇年から五〇年にかけても、その投稿者のような厳しい態度を崩していない人たちがかなりいたらしいことは想像にかたくない。そしてこのようなことを念頭に置きながら、ホールデンの妹フィービー (Phoebe) とその母との間に交わされる以下の会話を読むと、'lousy' という品の悪い言葉遣いがついに中流上層階級の女の小学生にまで浸透してきたか、というある種の感慨をわれわれはおぼえざるを得ない。

“Well. Go to sleep now. How was your dinner?”

“Lousy,” Phoebe said.

“You heard what your father said about using that word. What was lousy about it?...” (230: 177)

「そう。それじゃ、もうお休みなさい。お夕食はどうだったの？」

「最低よ」とフィービは言った。

「そんな言葉遣い、お父さまが何て言ってらしたか聞いたでしょう。何が最低なの？…」

ホールデンやフィービの父親は会社の顧問弁護士 (a corporation lawyer, 140: 107) という社会的地位の高い職業についている。そしてこの父は日頃子どもたちに'lousy'のような品のない言葉は使うなと戒めていたものと想像される。それだけに却ってホールデンはその厳しい父に対して反抗して、'lousy'およびそれに類した幾多の、品位に欠ける形容辞を連発しているのであろう。

もちろんホールデンの父は物語の中に直接顔を出すことは一度もない。しかしホールデンがいよいよペンシー・プレップ(Pency Prep)から追い出されたいということを知ったフィービは、何度も「パパに殺されてしまうわよ」(Daddy's gonna kill you. " 214: 165) と叫ぶことからしても、子どもたちに対する父の厳しい態度が伝わってくる。

もしかしたら、作者サリンジャーがハイスクール時代にマンハッタンなる名門校マクバーニー(McBurney)を中途退学になったときも、彼と父の間に似たような緊張した雰囲気か漂っていたのかもしれない。ホールデンがフェンシング部のマネージャーとして対抗試合に出かけた相手校は、なんとサリンジャー自身が中途退学になったマクバーニー校であった！ そしてホールデンたちは試合のチャンスすら失って帰ってきたのであった。

「パパに殺されちゃうわよ」という妹の警告に対して、ホールデンは、そんなことはない、最悪の場合でも、さんざん怒鳴りつけられて軍人養成学校にやらされるくらいのものだと答える。作者サリンジャーもまたマクバーニー校を退学して、のちに湾岸戦争の総司令官たるシュワルツコップ将軍(General Schwarzkopf)が卒業することになるヴァーレー・フォージ陸軍幼年学校(Valley Forge Military Academy)に入学する。サリンジャーはヴェトナム戦争のノンフィクション小説『友軍の砲撃』(C. D. Bryan, *Friendly Fire*, 1976)に陸軍中佐として実名で登場するシュワルツコップの先輩卒業生だったのである。しかし職業軍人ほどサリンジャーに似つかわしくないものはない。そしてだからこそ彼は秀逸な短編「エズメに捧ぐ—」("For Esmé—with Love and Squalor")を書くことができたのである。

話がまたしても脱線気味になってしまったが、もう少し我慢してもらお

う。『ライ麦畑』にたびたび顔を出す'crumby'は'lousy'と同じ意味を表す単語である。'crumby'とは'crummy'のことで、DAREはこれを'Infested with lice, lousy'の意味だと説明している。そしてこれまたホールデン好みの言葉で、物語の随所に出てくる。彼はたとえば第九章で例のホテルの変態者観察のあと次のように述懐する。

Sometimes I can think of very crumby stuff I wouldn't mind doing if the opportunity came up. I can even see how it might be quite fun, in a crumby way, and if you were both sort of drunk and all, to get a girl and squirt water or something all over each other's face. The thing is, though, I don't *like* the idea. It stinks, if you analyze it. I think if you don't really like a girl, you shouldn't horse around with her at all, and if you do like her face, you ought to be careful about doing crumby stuff to it, like squirting water all over it. It's really *too* bad that so much crumby stuff is a lot of fun sometimes. Girls aren't too much help, either, when you start trying not to get too crumby, when you start trying not to spoil anything really good. I knew this one girl, a couple of years ago, that was even crumbier than I was. Boy, was she crumby! We had a lot of fun, though, for a while, in a crumby way. (81-82: 62-3) [Italics in original]

時にはぼくだってひどくいやらしいことを思いつくことができるんだ。機会さえあったら、そういうことをやりかねないよ。女の子ができて、お互いの顔一面に水なんかを吹きかけっこするというのも、二人とも酔っ払ったりなんかしていたら、いやらしいっていう点でずいぶん面白いことだろうということだって想像できるさ。ただぼくはそういうことを考えること自体嫌いなんだ。よくよく吟味してみると、悪臭が漂ってくる感じだね。本当に好きな女の子でないなら、ふざけ合うことなんかきっぱりと止めるべきだと思うよ。女の子が好きだということは、顔が好きなはずだし、顔が好きなら、顔中に水を吹っかけるなんて、そんないやらしいことを顔に対して行うことには慎重であるべきだ。そんないやらしいことが時には面白くてたまらなくなるというのは、本当に困ったことだ。それに女の子ってのは、こっちがあんまりいやらしいことはするまいと努力し始めたり、また本当にいいものを傷つけまいと努力しだしたりしても、たいして頼りにならないものなんだ。二、三年ほど前にある女の子と付き合ったことがあっ

たけど、これがまたぼくよりずっといやらしかったよ。いやらしいってならなかったな、まったく。でもしばらくの間、いやらしいなりに二人で結構面白かったんだからなあ。

引用が長くなってしまったが、どれだけの長さの引用にどれだけの数の 'crumby' が入っているかを見てもらうためには、これも止むを得ぬことだ。念の為に 'crumby' に下線を引いておいたのでしばし眺めてほしい。そしてこの引用を読んで誰しも感じることは、'crumby' という同一の形容詞が八回も連続して使用されているということである。たまには 'lousy' や 'stupid' その他の同意語で入れ替えてよさそうなものなのにとする向きも必ずあるはずである。だが少なくともこの点に関する限りホールデンは頑固一徹、'crumby' 一点張りである。もともと彼には、一度ある言い回しを使うと、しばらくの間それだけにこだわる傾向があり、ここでそれが典型的な形で現れているのだが、それにしても度が過ぎる気がする。まるで、自分は情けないほど語彙が貧弱で (I have a lousy vocabulary..., 13: 9) という告白を自己露出気味に演技化しているかのようでさえある。つまり換言すれば、こうした同一形容詞の単調な反復、繰り返すこそ、本稿の〈その二 ...and all を中心に〉で述べておいたのと同類の、ホールデン一流の魔術的なレトリックの機能を果たしているということである。

それにしても、'lousy' や 'crumby'、あるいは 'moron' といった品の悪い形容詞をこのように連発する息子の語りを聞いたら、「会社の顧問弁護士」たる父親はさぞかし肝をつぶしたことであろう。

閑話休題。

メンケン は『アメリカの言語・補遺 I』 (*The American Language: Supplement One*) の中で次のようなことを述べている。つまり一般にアメリカ英語とされている 'swell' (しゃれ者、素敵な) はもともと十九世紀初めに名詞および形容詞としてイギリスでさかんに使われた語であったが、一九一〇年頃にアメリカで復活し、'lousy' (最低の) の反意語 (antonym) となったのだと。

*Swell* had a revival in the United States c. 1910, and acquired an antonym in *lousy*. Both became counter-words of the first virulence, and there is an illustrative story about an Eastern literatus who said to a movie-queen: "The

only words used in Hollywood are *swell* and *lousy*.” Her reply was: “What words are they?”<sup>15</sup>

'swell'は一九一〇年頃に合衆国で復活し、'lousy'のなかに反意語を獲得した。双方とも第一級の悪性伝染力をはらんだ流行語となったのだが、ある東部の知識人がさる銀幕の女王にむかって「ハリウッドで使われる唯一の言葉は'swell'と'lousy'ですね」と言ったとかという例証的な逸話がある。「それってどんな言葉？」というのが彼女の返答だった。

'swell'と'lousy'が互いに反意語としての関係を成立させるにいたったというメンケンの言葉は、すでにわれわれが先に引用したフィッツジェラルドに宛てたヘミングウェイの手紙を読み直せば、なるほどと納得がゆくはずである。その対比的な二つの形容詞を含む文章を引用してみよう。

What made 3 Soldiers a swell book was the war. What made Streets of Night a lousy book was Boston.<sup>16</sup>

『三人の兵士』を素晴らしい本にしたのは戦争でした。『夜の街』を駄作にしたのはボストンです。

この手紙では'lousy'が三回用いられていることはすでに述べたが、じつは'swell'もなんと四回使われているのだ。またさらにのちに問題となる'grand'が一回、'nice'が三回使用されている。そしてその上に H. L.メンケンの名前も言及されているのであるから、少なくともいまの私にはまことに有難く貴重な手紙であるといわねばならない。

反意語としての'swell'と'lousy'の関係をさらに立証づけるものとして、上のヘミングウェイの手紙のほかに、ナサニル・ウェストの『ミス・ロンリーハーツ（人生相談の回答者）』（*Miss Lonelyhearts*, 1933）に出てくる次の会話を挙げることができる。

“Why don't you let me alone?” She had begun to cry. “I felt swell before you came, and now I feel lousy. Go away. Please go away.”<sup>17</sup>

「どうしてそっとしておいてくれないの？」と、彼女はもう泣き出していた。「わたし、あなたがおいでになる前は素敵な気分でしたのに、今はとってもみじめな気持ちだわ。もう行ってちょうだい。お願いだからあっちへ行って」

むろんどの小説作品の中でもこのようにきちんとした反意語関係が成立しているわけではない。たとえば一九三〇年出版のドス・パソスの『北緯四十二度』(*The 42nd Parallel*)では'swell'の反意語として'sick'が使用されている。

“... we're flat, but I feel swell...”

“Hell, I feel sick as a dog.”<sup>18</sup>

「おれたちは文無しだけど、おらあ気分が凄くいいぜ...」

「畜生、こちとらは吐き気がしてくるくらいだ」

それでもこの物語でもページが違えば、'swell kids'(106)および'lousy bums'(57)というぐあいに両者の反意語的使用は見られる。

それではメンケンの発言からわずか六年後に出版された『ライ麦畑』の世界では、この問題がどうなっているのだろうか。

『ライ麦畑』では'lousy'がじつにさまざまな場面でさまざまに使用されていることはいうまでもないことだが、よく注意してみると、それに劣らずに'swell'の出現も非常に目につく

最初に'swell'が出てくる場面は第三章。ここではオッセンバーガー(Ossenburger)というペンシー・プレップの大先輩で、葬儀屋として成功した成金が、新しい学生寮として「オッセンバーガー記念棟」(the Ossenburger Memorial Wing)を母校に寄付し、いまキャデラックで母校に乗りつけ、学校の礼拝堂でスピーチを行っている。

He (= Ossenburger) was telling us all about what a swell guy he was, what a hot-shot and all.... (23: 17)

オッセンバーガーは自分がどんなに素晴らしい人か、どんなに大物であるかなどについて語り、・・・

ここに見られる'a swell guy'は、ホールデンが皮肉と軽蔑を込めて使っている言葉だが、一応「立派な人物」という意味に変わりはない。これに対して次の例の'lousy'は、ホールデンが相手に対する精いっぱい侮蔑と嫌悪の念を込めて使用している言葉だ。

He had a lousy personality. (102: 78)<sup>19</sup>

彼はなんともいやな人物だった。

なにしろこの「いやな人物」はホールデンにとっての理想の娘ジェーン・ギャラハー(Jane Gallagher)を悲しませてやまない継父で、彼は義理の娘のいる家の中で裸のまま走りまわる大酒飲み(booze hound)である。

またつぎに第十五章におけるホールデンとそのガールフレンドのサリー・ヘイズ(Sally Hayes)との電話による会話を聞いてみよう。

“Yes — who is this?” ....

“Holden Caulfield. How are you?”

“Holden! I'm fine! How are you?”

“Swell. Listen. How are ya, anyway? I mean how's school?”

“Fine,” she said. “I mean — you know.”

“Swell....” (138: 106)

「はい、そうです。そちらはどなたですか？」 ....

「ホールデンなのね！ 元気よ。あなたはどうか？」

「元気だよ。それはそうと、きみの方、どんなぐあい？ つまり学校のことだけどさ」

「うまくいってるわ」と彼女は言う。「つまり一わかるでしょう」

「それはよかった。....」

この会話で注目されるのは、サリーがもっぱら'fine'を使うのに対して、ホールデンは'swell'を口にするということだ。'swell'がいちおう俗語的形容詞だとすれば、'fine'は正統派ということになるだろう。そしていよいよ二人がデートするために顔を合わせると、サリーが “It's marvelous to see you!” と叫ぶのに対して、ホールデンの方は相変わらず “Swell to see you.” (162: 124)と挨拶する。俗語的表現を愛用するホールデンとしては当然のことだ。これに対してサリーは良家の子女らしい言葉遣いをしているのだ。

ホールデンは'lousy'とともに'swell'も大変に好きなのだ。そして彼は地の文でもかなり'swell'を好んで使う。 'a swell song' (93: 71) ; 'The kid was swell.'(150: 115); 'girls with lousy legs, girls that looked like swell girls' (160: 123) ; 'If a girl looks swell...' (162: 125); 'a helluva swell guy' (185: 142)等々。

さらに以下の四つの例に見られる'feel swell'と'feel lousy'を対比してみれば、メンケンの観察がここでもまたいっそう説得力を増してくることにな



る。

Then, on Wednesday, I'd go home all rested up and feeling swell. (66: 51)  
それから水曜日になったら、うんと休養していい気分であらへて帰って行こう。

I felt swell, for a change. (207: 159)  
いつもと違って気分がよかつた。

Anyway, it made me feel depressed and lousy again,....(110: 84)<sup>20</sup>  
とにかくそのためにぼくはまたもや気分が滅入り、いやな気分になつてしまった....。

I wasn't sleepy or anything, but I was feeling sort of lousy. (118: 90)  
眠いとかなんとかいうのではないが、なんだかいやな気分だつた。

以上見てきたことから、ホールデンの世界でも'swell'と'lousy'が反意語の関係を成立させていると言い切つてよさそうである。

そしてこのように'swell'と'lousy'が反意語関係をつくっているとすれば、こんどは逆に'swell'の同意語 (synonym)としての'grand' (素晴らしい) が浮上してくる。だがここに少々厄介な問題が持ち上がる。ホールデンは'grand'が大嫌いなのだ。

まずわれわれは上記のホールデンとサリーの会話を読みつづけていくうちに、次のような二人のやり取りに遭遇する。

“...It's Sunday, but there's always one or two matinees going on Sunday. Benefits and that stuff. Would you care to go?”

“I'd love to. Grand.”

*Grand.* If there's one word I hate, it's grand. It's so phony. (138: 106)

「...今日は日曜日だけど、日曜だつていつもマチネは一つか二つはやってるよ。慈善興行やなんか。行きたくない？」

「ぜひ行きたいわ。最高ね」

〈最高ね〉か。ぼくが嫌いな言葉があるとすれば、それは〈最高ね〉という言葉だ。あれはインチキそのものだよ。

'swell'と'grand'が同意語であるとすれば、サリーが使った'grand'を'swell'で置き換えても決しておかしくないはずだ。それなのにホールデンは金輪際これを使おうとしない。使わないどころか、この言葉に強い反発をおぼえる。そしてそれはインチキ(phony)だという。なぜ彼はそれをインチキだときめつけるのか。そういえば第二章でも同じ状況が見られたな、と読者は思い起こす。

Then he said, "I had the privilege of meeting your mother and dad when they had their little chat with Dr. Thurmer some weeks ago. They're grand people."

"Yes. They are. They're very nice."

Grand. There's a word I really hate. It's a phony. I could puke every time I hear it. (14: 9)

それから先生が言った。「何週間か前、きみのお母さんとお父さんが校長先生(サーマー博士)とちょっとした雑談をしておられたとき、わたしも幸いお目にかかることができましたね。なかなか立派なお方たちじゃないか」

「はあ、そうです。非常にいい人たちです」

〈立派な〉か。これこそほくの大嫌いな言葉なんだ。インチキというものさ。ほくはその言葉を聞いたんに吐き気がしてきそうなんだ。

これはホールデンが歴史担当のスペンサー先生との長い、長い会話のひとつまである。ホールデンは歴史の単位を落とし、いま先生に別れの挨拶にきているのである。スペンサー先生の言う'grand'は、WNID3の定義に従えば、'admirable'〈an admirable old man〉という意味になるであろう。そしてこの意味での'grand'の使用に反発する必要はなさそうなのに、ホールデンは吐き気をおぼえるほどに忌み嫌う。しかも彼はスペンサー先生の'grand'に対して'nice'を持ち出して対抗しようとするかのようである。

ここでまたしてもメンケンで恐縮だが、メンケンは'excellent,' 'superior,' 'noteworthy'などを意味する'grand'もれっきとしたアメリカ語であると主張する。<sup>21</sup> これは『アメリカの言語・補遺I』における指摘であるが、メンケンはまた同書のごく初めのあたりでこう述べている——「素晴らしい(excellent) という意味での'grand'はいまやほとんど立派なアメリカ語であ

るが、これを'swell'のわきに置いてみると、ある種の優雅さ (a certain elegance)を帯びてくる」と。<sup>22</sup>

考えてみれば、ホールデンにとって優雅さの世界とは、同時に見栄と偽善に満ちた嫌悪すべき世界でもあったはずである。彼がサリーやスペンサー先生の使う'grand'という形容詞の中にインチキ(phony)を嗅ぎつけて嘔吐をもよおしかねないというのも、この〈優雅さ〉の響きの故であったに違いない。

その上メンケンも早くも『アメリカの言語』の中で、'nice'についてこう言っている——何事も満足すべき状態にあることを意味する'nice'は、かつては俗語としてのみ使われていたが、今日“a nice day,” “a nice time,” “a nice hotel”などという言い方を疑問視する人はいないであろう。そして彼はさらに注の中でこう続ける。

'nice'はこれまで多くのライバル語を持ってきた。たとえばイギリスでは'ripping'と'topping'、アメリカでは'grand'と'swell'というぐあいに。しかし'nice'はよく頑張っている (but it hangs on)。<sup>23</sup>

『ライ麦畑』の読者は、上述のホールデンとスペンサー先生のやり取りを読みながら、ホールデンがスペンサー先生の'grand'に対してわざわざ'nice'を持ち出すあたりに、メンケンのいわゆる〈'nice'の頑張り〉ぶりを見る思いがしないだろうか。

ところでDuane Edwardsという学者が一九七七年に'Holden Caulfield: Don't Ever Tell Anybody Anything'という『ライ麦畑』論を発表し、これまでの『ライ麦畑』賛美論者たちはホールデンの人的弱点や欠陥に目をつむり、やたらと彼の人間像を理想化ないしは聖化しすぎる傾向があったと批判しながら、主人公の言動におけるフォニーな具体例をいちいち執拗に指摘したことがあった。私などはこの論文を読みながら、主人公の人格的欠陥をあげつらうことにのみ情熱を注ぐ読者というのはある種の自己嫌悪に見舞われるのではあるまいか、いったいこういう御仁は何が面白くて作品論など書くのだろうか、そもそも人間存在などというものは、作品の登場人物をも含めて深刻な矛盾をかかえているからこそ興味深いのではないのか、ホールデンだとて例外ではあるまい、などといふ余計なことを考えてしまうのだが、まあそれはそれとして、エドワーズ氏はこの論文の中で次のように述べている。

He (= Holden) criticizes “old Spencer” (and others) for using a phony word like “grand” (9), but he himself uses equally phony words such as “nice” (1) and “swell” (124).<sup>24</sup>

つまりホールデンは'grand'というフォニーな言葉を使うとってスペンサー先生やガールフレンドのサリーを非難するくせに、自分自身も'nice'や'swell'といったフォニーな言葉を使用しているではないかというわけである。こうなってくるととくにわれわれ外国人には何がフォニーな言葉で、何がそうでないのか分からなくなってしまうのだが、そして'grand'も'swell'も、そして'nice'も同じようにアメリカ的な口語表現であったのだろうが、しかしこれまで述べてきたようなメンケンの説明を借りての分析からしても、エドワーズ氏のホールデン非難は正鵠を得ていないといわなければならない。つまりエドワーズ氏は、メンケンの言う'grand'の〈優雅な〉響きを見逃した議論を行っていると思うのだ。

むろん先に挙げたヘミングウェイの手紙の中の次のような文章を検討してみた場合、'grand'と'nice'の間にどれほどのニュアンスの相違があるのかという疑問も出てくるかもしれない。

You're write about the Murphy's. They're grand people. Nice people are so damned nice.<sup>25</sup>

あなたはマーフィー家の人々のことを書いておられます。彼らは素晴らしい人たちです。いい人々というのは底抜けにいいですからね。

しかし'grand'という形容詞に関しては、ここでわれわれは上述のメンケンの見方のほかに、次のような歴史的事実をも考慮に入れる必要もあるだろう。つまり周知のように、若かりし頃のヘミングウェイがthe Kansas City *Star* 紙の見習い記者になったとき、次のような〈文章心得〉をたたき込まれた。一九一七年の話である。

Avoid the use of adjectives, especially such extravagant ones as *splendid*, *gorgeous*, *grand*, *magnificent*, etc.<sup>26</sup>

つまり新聞記事を書く際には、こうした〈大袈裟な〉形容詞の使用は避けよということなのであるが、ここでも'grand'が〈大袈裟な〉言葉の一つに

数えられているのだ。というわけで'grand'はやはり'nice'や'swell'とは格が違うといったニュアンスを帯びていることに間違いはない。そしてもしそうならば、これまた、先のエドワーズ教授の見解がホールデンに対する言いがかりにすぎないということの傍証にもなっているといつてよいであろう。

なお'grand'についても一言蛇足を付け加えておこう。『武器よさらば』の第五部第四十一章で主人公フレデリック・ヘンリー(Frederic Henry)と恋人キャサリン・バークレー(Catherine Barkley)が次のような会話を交わす。

“Did you tell him he could do it?” she asked.

“Yes.”

“Isn't that grand. Now it will be over in an hour. I'm almost done, darling. I'm going all to pieces....”<sup>27</sup>

「やってもいいって、先生におっしゃってくださった？」と彼女は訊いた。

「うん」

「それは本当によかった。これで一時間もすればすむんだわ。ねえ、あたし、もうくたくたなの。バラバラになってしまいそう…」

陣痛をおさえる麻酔の効き目も薄くなり、今や死の予感に見舞われつつあるキャサリンが、いよいよ帝王切開に踏み切ることに決まってひとまずホッとした気分になった場面である。彼女は恋人のフレデリック・ヘンリーに精いっぱい元気なところを見せようとして痛ましい演技を続けるのであるが、これで安心できるのだという気持ちをいま恋人とともに共有したく思っているのだ。あるいはある種の甘えの気持ちとでもいおうか。そしてそうした状況の中にあるキャサリンの心情を読者に伝えるためには、ここはやはり'grand'という形容詞を使用することが作者にとってどうしても必要であった——と私には思われる。これが、アメリカ娘ではなく、スコットランド生まれのイギリス人女性の篤志看護婦人としての言葉の使い方なのだという意識はヘミングウェイにはなかったと思う。つまり少なくともこうした状況におけるキャサリンが使う形容詞としては、'grand'の方が'good'や'nice'、あるいは'swell'などよりも芸術的效果が高いとヘミングウェイは判断したのに違いないのだ。

くどいようだが、さらにもう一例、サリンジャーの他の作品を参照して

みよう。次の一節は「大工よ、屋根の梁を高くあげよ」(“Raise High the Roof Beam, Carpenters”)におけるシーモア・グラス (Seymour Glass)の日記からのものである。

She looked over at me when the children in the picture brought in the kitten to show their mother. M. loved the kitten and wanted me to love it.... Later, when we were having a drink at the station, she asked me if I didn't think that kitten was 'rather nice.' She doesn't use the word 'cute' any more. When did I ever frighten her out of her normal vocabulary?<sup>28</sup>

映画の中で子供たちが母親に見せるために仔猫を連れてくると、彼女はぼくの方を向いた。ミュリエルはその仔猫が大変気に入り、ぼくにも気に入ってほしかったのだ。・・・その後、駅でいっしょに飲み物を飲んでいると、彼女はあの仔猫を「なかなかいい」と思いませんかとぼくに訊いた。彼女はもう「かわいらしい」という言葉を使わないのだ。いったいいつぼくが彼女を怖がらせて、彼女に彼女らしいいつもの言葉を使わせなくしてしまったのだろうか？

ここに見られる'cute'と'nice'の対立にあって、ホールデン流の区別立てをするならば、フォニーの響きを持つのは'cute'の方であって、'nice'ではない。メンケンによれば、一九三〇年代半ばには'cute'を“bastard American expressions”の一つに数えた人もいたらしいが、<sup>29</sup> 今日'devious; underhanded; shrewd; tricky; skillful and cunning'を意味する以外はスラングの部類に入らないことになっている。(Cf. *HDA S*) しかしそれでもそれがなにほどかの気取った響きを帯びていることは間違いないのであって、少なくともこのように『大工よ』の中にあって'cute'と'nice'の対立関係を見出だせるとすれば、『ライ麦畑』においても'grand'と'nice'の対立関係は成立しているのであって、やはりエドワーズ教授の所説は受け入れがたいといわざるを得ないのである。

さて話が前後することになってしまったが、サリーがホールデンと電話でデートの約束をした際'grand'を連発し、それを聞いたホールデンがその'grand'をフォニーと決めつけたことはすでに述べた。そしていよいよ二人が約束通り顔を合わせる段になると、こんどは彼女、'grand'以上に大袈裟な'marvelous'を口にする。

“Holden!” she said. “It’s marvelous to see you! It’s been ages.

(162: 124)

「ホールデン！」と彼女は言った。「あなたに会えて夢みたいだわ。何年振りみたい」

一方ホールデンはというと、「腹立たしい気持ち」(a pain in the ass) になりつつ、やはり愛用の'swell'を使って答える。

“Swell to see you.” I said. I mean it, too. “How are ya, anyway?”

「ぼくも会えて嬉しいよ。とにかく、元気？」

するとサリーはまたしても、'marvelous'。<sup>30</sup>

“Absolutely marvelous. Am I late?” (162: 124)

「最高もいいところよ。あたし、遅れた？」

というわけで、ホールデンとサリーの会話における言葉遣いの相違がすでに二人の仲の上に垂れこめつつある暗雲の予兆となっているのである。やがて二人は芝居を観て、ラジオ・シティでスケートを楽しんだあと、バーに入って雑談を始める。しかしホールデンが学校生活への不満やら人生の不安などを本音で語りだすと、会話は緊張をはらみ、お互いの人生観の相違が浮き彫りにされる。そしてついに二人のデートは破局を迎え、ホールデンは叫ぶ——「きみと話していると、むしゃくしゃしてケツが痛くなるんだ」(“You give me a royal pain in the ass....” (173: 133) すると「フォニー娘の女王」(the queen of the phonies, 152: 116)たるサリーは、男の子にそんなことを言われたのは生まれて初めてだと言って泣き出す始末である。

メンケンが『アメリカの言語』の増補版を出したのは一九三六年の四月、また『アメリカの言語—補遺 I』を刊行したのは一九四五年の八月のことであった。ホールデン・コルフフィールドが三歳と十二歳のときである。ホールデンは幼児の頃から'lousy'、'nice'、'swell'、'grand'といったいかにも口語的な形容詞を耳にしながら育ってきたはずである。作者サリンジャーはこれらの形容詞に'crazy'、'crumby'、'corny'、'dopey'、'phony'、'goddam'、'damn'、'stupid'、'dumb'、'crappy'、'moron'などの同類語を巧みに織り混ぜながら、いわば『ライ麦畑でつかまえて』の言語世界をとおして二十世紀前

半におけるアメリカの口語英語が持つダイナミズムを見事にドラマ化してみせたということになるのだ。

## 注

- 1 John Steinbeck, *The Long Valley* (1938; A Bantam Book, 1972), 198. なお同じ作者の *The Grapes of Wrath* (1939; The Viking Press, Inc., 1967), 27. には “An' Granma says you was just lousy with the spirit.” (あんたは [聖] 霊でいっぱいだって、うちのばあさんが言ってたよ) という例もある。Tom Joad の言葉である。says=said.
- 2 この用例は、私がメモ用紙に書き写しておいたものだが、残念ながら出典の記入を忘れてしまい、思い出すことができない。
- 3 James Joyce, *Ulysses*; (1922; A Penguin Modern Classic, 1972), 13, 28. 'rotto = Slang for rotten.' Cf. Don Difford, “*Ulysses*” *Annotated* (Second ed.: Univ. of California Press, 1988), 27.
- 4 以下 *D A R E* と略す。
- 5 Paul Russel, *The Great War and Modern Memory* (1975; Oxford Univ. Press paperback, 1977), 49.
- 6 Ernest Hemingway, *A Farewell to Arms* (1929; Charles Scribner's Sons, 1969), 185.
- 7 *Ernest Hemingway: Selected Letters, 1917-1961*, ed. Carlos Baker (New York: Scribners, 1981), 297. なお『西部戦線異常なし』の英訳 Erich Maria Remarque, *All Quiet on the Western Front* (London: G.P. Putnam's Sons, 1929) は三月に出版され、それにはたとえば次のような一節がある。  
Suddenly little Kropp throws his cigarette away, stamps on it savagely, and looking round him with a broken and distracted face, stammers: “Damned shit, the damned shit!” (25)
- 8 Quoted in Jonathan Veitch, *American Superrealism—Nathaniel West and Politics of Representation in the 1930s* (The Univ. of Wisconsin Press, 1997), 47.
- 9 H. L. Mencken, *The American Language* (1919, 1923, 1936; N. Y.: Alfred A. Knopf, 1949), 566.
- 10 *Ernest Hemingway: Selected Letters*, 176-7.
- 11 *American Speech* III, 4 (April 1928), 345.
- 12 *Ibid.* VII, 5 (June 1932), 334.
- 13 Stuart Berg Flexner and Anne H. Soukhanov, *Speaking Freely: A Guided Tour of American English from Plymouth Rock to Silicon Valley* (N.Y.: Oxford Univ. Press, 1997), 87-88.
- 14 J. D. Salinger, “Teddy” in *Nine Stories* (1953; Little, Brown and Co. paperback, 1991), 173.
- 15 Mencken, *The American Language: Supplement One* (1945; N. Y. Alfred A. Knopf, 1952), 421-2.
- 16 *Ernest Hemingway: Selected Letters*, 176.
- 17 *The Complete Works of Nathaniel West* (Farrar, Straus & Giroux, Inc., 1957), 82. なおこの件については *O E D S* の引用から示唆を受けた。



- 18 John Dos Passos, *The 42nd Parallel* (1930) in *U. S. A.* (Boston: Houghton Mifflin Co., 1960), 67.
- 19 「いやな人物」という場合、ホールデンはただ一回だけ名詞の'louse'を使っている。Cf. *The bartender was a louse, too.* (185: 142) 'louse'を人間の蔑称として使う例については、*OED*は十七世紀のものを引用している。それにもかかわらず*DAS*はこれをアメリカのスラングとして、'Any disliked person, usu. male'と定義づけ、かつVery commonとしている。またすでに触れてある「ジョンズ・ホプキンス大学のスラング」のリストにも'louse'(— a mean or contemptible person)が含まれている。Cf. *American Speech* VII, 5 (June 1932), 336. さらに*HDA S*もこれをアメリカの俗語として扱っている。つまりイギリスよりもアメリカで圧倒的に愛用されるということなのであろう。
- 20 もっともホールデンといえども'lousy'一点張りというわけではなく、'rotten'をつかうこともある— *I got feeling so lonesome and rotten, I even felt like waking Ackley up.* (64: 50)
- 21 *The American Language: Supplement One*, 32, 421.
- 22 *Ibid.* 13-4.
- 23 *The American Language*, 557.
- 24 Duane Edwards, "Holden Caulfield: 'Don't Ever Tell Anybody Anything'" in *Critical Essays on "The Catcher in the Rye,"* ed. Joel Salzberg (Boston: G. K. Hall, 1990), 150.
- 25 *Hemingway: Selected Letters*, 176.
- 26 Cf. Charles A. Fenton, *The Apprenticeship of Ernest Hemingway: The Early Years* (1957; rpt. Octagon Books, 1975), 33.
- 27 *A Farewell to Arms*, 322.
- 28 J. D. Salinger, *Raise High the Roof Beam, Carpenters and Seymour—An Introduction* (1959; Little, Brown and Co. paperback edition, 1962), 67.
- 29 *The American Language*, 226.
- 30 ホールデンは第十二章でLillian Simmonsという、兄D. B.のかつての女友だちに出くわし、"How marvelous to see you!"と挨拶されたとき、即座に彼女を「掛け値なしのインチキ女」(Strictly a phony, 113: 86)と断定している。